

II 特別シリーズII

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第82回

ユネスコ・アジア文化センターの活動報告



齋藤盛午
(ユネスコ・アジア文化センター人物交流部)

7日間にわたり「日タイ高校生
科学技術交流プログラム」実施

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCUCU)は、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の支援を受け、日本・アジア青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプランの一環として2017年2月7日(火)から13日(月)までの7日間にわたり、「日タイ高校生科学技術交流プログラム」を実施しました。本プログラムではタイ教育省の推薦を受けたタイ全国の高校生14名、引率教職員1名、計15名を本邦に招へいしました。

①日本の最先端技術に触れる

8日午前には訪問した日本科学未来館では、各自の関心分野に応じて展示を見学したほか全員でASIMOの実演を見学しました。日本の優れたロボット技術にタイの高校生から大きな拍手があげられました。同日午後には東京スカイツリーを訪問し、その高さや展望台



アザラシ型ロボット「バロ」について説明を受ける参加者(サイエンス・スクエアつくば)

プログラム	
1日目	到着、オリエンテーション
2日目	日本科学未来館見学、浅草散策、東京スカイツリー見学
3日目	筑波宇宙センター見学、サイエンス・スクエアつくば見学、ACCUCU訪問、歓迎レセプション
4日目	市川学園 市川中学・高等学校(SSH)訪問、ゲストスピーカー(日本留学経験者)との交流
5日目	ホームビジット
6日目	日タイ高校生交流会、プログラムの振り返り
7日目	帰国

からの眺めはもちろんエレベーターの速度やその技術にも参加高校生は高い関心を寄せていました。9日午前には訪問した筑波宇宙センターでは、「これまでテレビのニュースや映画の中でしか見たことがなかった管制室を実際に目の前で見る事ができ、まるで夢のようでした」との感想があがるなど、皆、目を輝かせていました。同日午後は、サイエンス・スクエアつくばを訪問し産業技術総合研究所の最新の研究に触れました。特にロボット技術の活用について多くの質問があり、ロボットと暮らす未来について考えを巡らす実りある時間を過ごしました。

②SSH訪問

10日、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)である市川学園市川中学校・高等学校を訪ねました。世界史の授業では日本の生徒とのグループワークやタイ文化についての発表を行いました。また、SSHの授業では化学・物理・生物のうち、それぞれの関心分野の教室で、同校の生徒の研究を見学、討論、また体験することで科学技術を通じた交流が行われました。また、同校の茶道部、書道部では日本文化を体験する機会が設けられました。

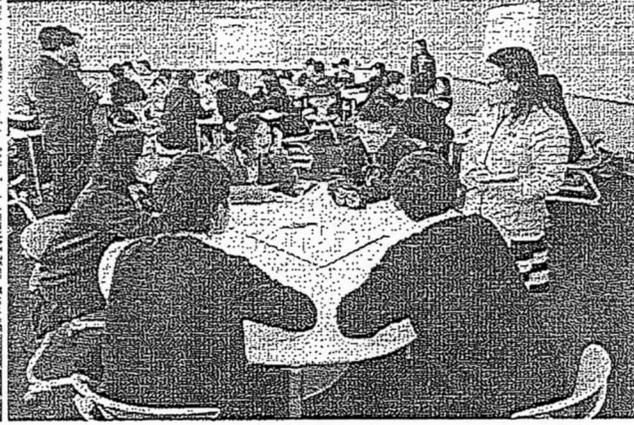
③深まる日タイ交流

12日には「日タイ高校生交流会」を実施しました。これは、タイの高校生により多くの日本の高校生とつながりをつくってほしい、国際交流に興味がある日本の高校生に機会を提供したい、科学技術に興味があるという共通点を持つ両国の高校生の架け橋になりたいという思いでACCUCUが企画したものです。タイからの高校生と同じ14名の日本の高校生がこの交流会に参加しました。東京近郊の学校はもちろん、長野県からも参加がありまし

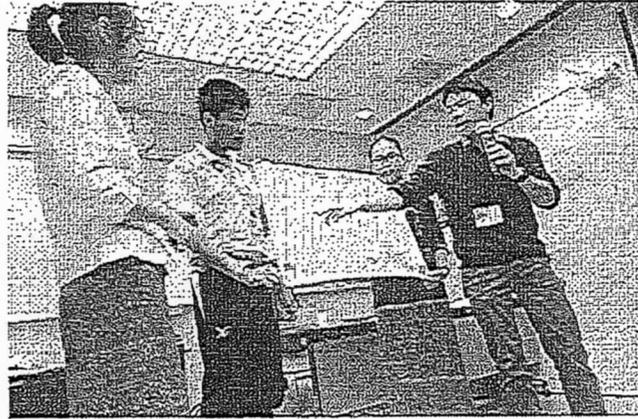




SSHの授業への参加(市川学園)



世界史の授業でのグループワーク(市川学園)



両国の生徒による発表



討論する両国の高校生(日タイ高校生交流会)

本プログラムに参加した、タイの高校生が日本の7日間の経験や今後の学習や研究に生かす、そしていつか留学生として再び日本にやってくることを心から楽しみにしています。弊セクターでは、タイはもちろんアジアに多くのアジアの優秀な若者が日本の魅力や文化、研究、就労につながるよう今後も積極的にさくらサイエンスプランを活用させていただきたいと思えます。

本プログラムに参加した、タイの高校生が日本の7日間の経験や今後の学習や研究に生かす、そしていつか留学生として再び日本にやってくることを心から楽しみにしています。弊セクターでは、タイはもちろんアジアに多くのアジアの優秀な若者が日本の魅力や文化、研究、就労につながるよう今後も積極的にさくらサイエンスプランを活用させていただきたいと思えます。

た。午前の部では、自己紹介やお互いの学校生活について知る活動を行い、午後の部では、「身のまわりの、困った」をテクノロジで解決しよう」というテーマでディスカッションをしました。互いの知識とアイデアを出し合い問題解決を目指す過程ですっかりと絆が深まり、交流会終了後は互いに別れを惜しみながらも再会を約束する姿がみられました。この交流会のほか、9日夜の欲送レセプションでは、関東国際高等学校のタイ語コースの生徒との交流の場が設けられました。また、11日のホームビジットもタイの高校生にとって忘れられない時間となりました。ホストファミリーと対面する前は少し不安そうな表情を浮かべていたタイの高校生たちですが、訪問終了後、満面の笑みで戻ってきました。ホストファミリーと交流できただけでなく、日本の一般家庭を訪問したことで日本文化を学ぶ良い機会となったようです。

④プログラムの成果・今後の展望
本プログラムで得られた最も大きな成果は、プログラムをきっかけに日本への興味・関心が高まったことです。9日夜に日本で留学生生活を過ごし、現在も日本でエンジニアとして働くタイ人をゲストスピーカーとして迎え、お話を伺いましたが、「日本に留学するためにはどういった準備をしたか」などたくさん質問があり、タイ高校生の日本留学への関心の高さが伺えました。11日夜に行ったプログラムの振り返りでは、「今回の訪日を通して、大学では日本に留学したいと考えようになった」と述べた参加者がいました。また、「ホームビジットを通して、日本に、第2の家族ができた。いつか必ず日本の家族にまた会いに来る」との言葉も印象的でした。タイの高校生はもちろん、彼らと交流した日本の高校生にも変化があったようです。「内向きな自分を変えたい」と理由で日タイ高校生交流会に参加した生徒は、終了後、「自分が変わった気がする。これからは様々なことにチャレンジしていきける自信を持ってたと笑顔で語りました。」